

奈良県立万葉文化館蔵

『首書評註 聖徳太子傳暦』解題

竹内 亮

【書誌情報】

(貴重書番号：口70)

〔体裁〕 版本、袋綴、四つ目綴、五冊

〔表紙〕 紺表紙、題簽「首書評註 聖徳太子傳暦」

〔料紙〕 楮紙

〔寸法〕 縦二七・二cm、横一九・八cm

〔行数等〕 本文六行十二字詰、頭注あり

〔刊年〕 寛文十二年

〔書肆〕 東洞院通六角下ル町 山口市郎兵衛

【解説】

『聖徳太子伝略』（以下、伝暦）は、平安時代の一〇世紀前半頃（延喜年間頃）には原形が成立していたとみられる聖徳太子の伝記で、太子に関する多くの伝承（荒唐無稽な所説も含まれる）を集成し、後世の太子信仰に多大な影響を与えた書物である。¹⁾ 上下二巻からなる編年史書の体裁をとる。編者は藤原兼輔とする説があるが、²⁾ 現在

では疑問視されている。³⁾

阿部隆一氏の整理によると、伝暦の現存諸本には大差のある異本は見られず、形式上の差違から甲類本と乙類本に大別される。甲類本は『七代記』などの先行書籍を引用した部分が大字の本文形式に、乙類本はそれらが小字の双行注形式になっているものである。ただし甲類本の中には部分的に乙類本の形態と合致するものがみられ、甲類から乙類の形式へと漸次移行したとも考えられる。甲類本は全て写本で、書写年代の比較的古いものが多く、現存最古の写本は鎌倉時代に遡る。乙類本は文明十六年（一四八四）の東大寺図書館蔵写本を現存最古とする写本と版本からなる。版本としては寛永五年（一六二八）刊本、および寛文十二年（一六七二）刊の本書が現存し、いずれも乙類に分類される。

当館蔵の寛文十二年刊首書評註本は、伝暦を巷間に広く流布せしめた寛永五年刊本（上下二分冊）の本文を訓点と共に踏襲した上で頭注形式の詳細な注釈を付し（首書評註）、五分冊構成としている。各分冊の内容は以下のとおり。第一冊…序文、上巻本文（欽明天皇三十一年から）、第二冊…上巻本文（用明天皇元年から）、第三冊…上巻本文（推古天皇六年から）、第四冊…下巻本文（推古天皇十六年から）、第五冊…下巻本文（推古天皇二十八年から）、刊記。

本書の注釈には多くの書籍が引用されており、引用書は『日本書紀』『元興寺縁起』などの和書をはじめ、仏典を含む漢籍、さらには『聖

徳太子平氏伝雜勘文』『太子伝玉林抄』など中世以降に成立した伝曆の注釈書などにも及ぶことから、出版当時に通行していた伝曆注釈書の概要が知られる。本書は伝曆のテキストと言うよりもむしろ近世に成立した伝曆注釈書の一種と見なすべきもので、こうした注釈書の普及を通じて伝曆を資料とする聖徳太子の聖人化が進み、神格化された太子像が創出されていったのである^④。

なお、現行の『続群書類従』（底本は宮内庁書陵部蔵〔和学講談所旧蔵〕写本）、『大日本仏教全書』（底本は東北大学附属図書館蔵〔狩野亨吉氏旧蔵〕応仁二年写本）などの伝略活字本は甲類写本を底本に用いており、近世に流布した伝曆の形態は乙類本である寛永五年刊本や本書のような版本に見られる^⑤。また、本書には寛永五年刊本の明らかな誤りを訂正した箇所もあり、伝曆校訂本としての価値も今なお失われていない。国文学研究資料館「日本古典籍総合目録データベース」^⑥では当館蔵本と版元（山口市郎兵衛）を同じくする本の高精細画像（国文学研究資料館蔵、早稲田大学蔵など）が全頁にわたり閲覧可能で、今後の活用が期待される。

註

① 伝曆の研究史については、田中嗣人『聖徳太子信仰の成立』吉川弘文館、一九八三年ほかを参照。

② 藤原猶雪『復原聖徳太子伝曆』聖徳太子奉賛会、一九二七年。

③ 阿部隆一「室町以前成立聖徳太子伝記類書誌」『聖徳太子論集』平楽寺書店、一九七一年。同「近世初期以前十七条憲法諸本解題並校勘記」『斯道文庫論集』一〇、一九七一年。以下、現存諸本の分類については阿部氏の見解に従う。

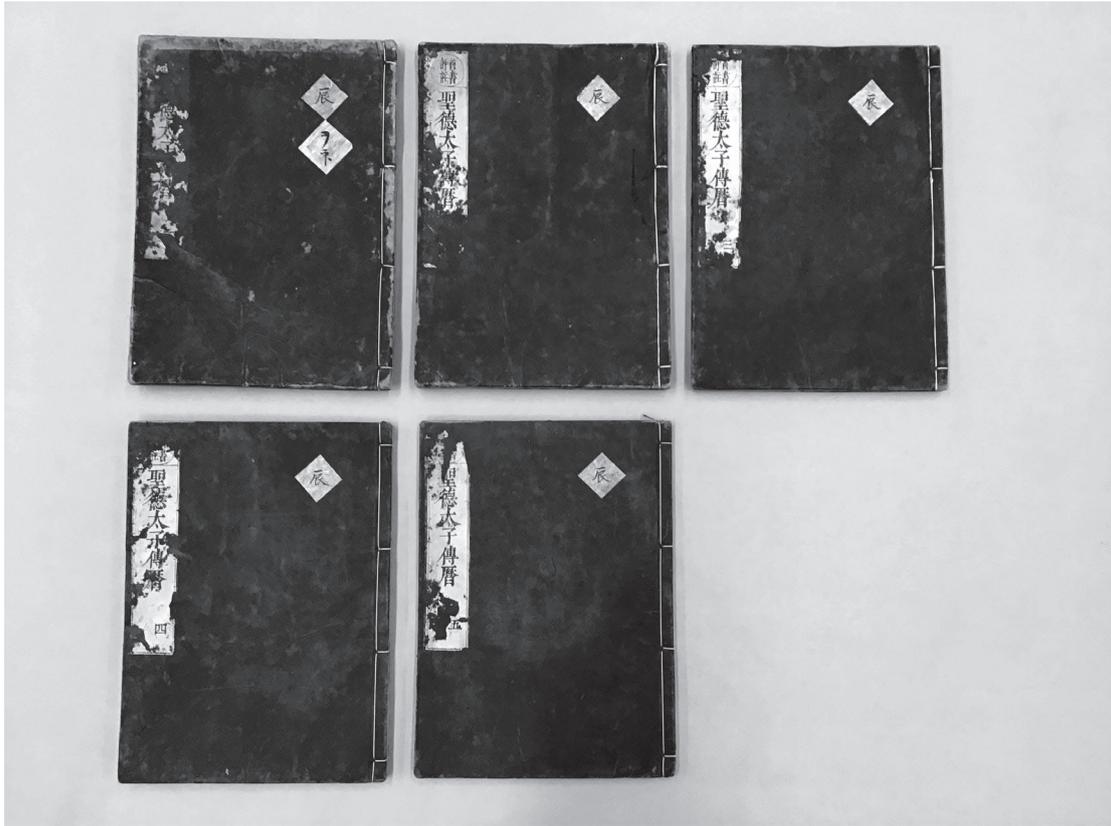
④ 蔵中進「解説」『東大寺図書館蔵文明十六年書写『聖徳太子伝曆』影印と研究』桜楓社、一九八五年。なお東大寺図書館蔵写本は乙類本の最善写本とされる。

⑤ 例えば続群書類従本では推古天皇十四年までを巻上、同十五年から巻下としているが、本書を含む他の多くの諸本は同十五年までを巻上、同十六年からの巻下としているなど、現行活字本には流布本である近世版本と異なる点が見受けられる。註④蔵中氏論文参照。

⑥ <http://base.lnija.ac.jp/~tkoten/>

⑦ 本書には同じ寛文十二年刊だが別の版元（吉田五郎兵衛尉、五条橋通塩亀町丁子屋）から出た本もある（國學院大學蔵、金沢大学蔵など）。詳細は日本古典籍総合目録データベース参照。

表紙集合



本文

